

逗子開成卒業式 卒業生答辞

まだ冷たい朝が続きますが、もう三月になりました。春めいた甘い風が、丸まった背筋を伸ばしてくれるようです。大きな逗子の海が眩しい空の光を浴びて、僕たちの船出を輝かしく祝福しているような今日の良き日、僕たちはこの学校を卒業します。

本日は僕たちのために、多くのご来賓の方々、校長先生、副校長先生をはじめとする先生方から保護者の皆様まで、このように盛大な卒業式を挙げていただき、誠にありがとうございます。ご多用の折にご臨席いただきました全ての皆様に、卒業生一同、心よりお礼申し上げます。また、ただいま高橋校長先生より御訓示の言葉を賜りましたこと、重ねてお礼申し上げます。

思い返せば六年前、僕たちは今と同じように、この体育館に並んで座っていました。今では小さく感じる校舎も、当時の自分には迷いそうなほど大きく感じられ、鮮やかなペンキで彩られた教室の中には、ぶかぶかの制服に着られた同級生の数々。どこを見渡しても知らない顔ばかりで、心が高揚したことを覚えています。入学式から間もなく、校内合宿がありました。まだお互いの名前を知らなければ、少しの礼儀も知らなかった僕たちは、すぐに友達と打ち解けあい、すぐにはしゃぎ、すぐに先生に叱られました。無礼にも先生方に対して友達口調で話しかけ、その度にこっ酷く叱られていたことが懐かしく思い出されます。「いや、今でもかなり友達口調で話しかけてくるぞ」という先生方の反論が聞こえてくるような気がしますが、それでも僕たちが酷く叱られることはなくなりました。これは決して先生方が僕たちの教育を諦めたのではなく、先生方と僕たちがこの六年間で築きあげた堅い信頼の形なのだと思います。

そんな絆で結ばれた僕たちは、とても力強い学年だったと思います。毎年の体育祭や文化祭はもちろんのこと、毎日の教室内までもが熱気に溢れていました。授業の間の休み時間には、廊下から神輿の掛け声が聞こえてくることもしばしばあるほどでした。何かを祝っていたわけではなく、ただ神輿の代わりに同級生を担ぐという遊びが流行していたのです。そんな予想だにしない遊びをいくつも編み出しては、その度に先生方から禁止されるという攻防戦がこの六年間に多々ありました。もちろん先生方と仲が悪かったわけではありません。むしろみんな先生のことが大好きでしたし、尊敬していました。隣のクラスのホームルーム中に教室に侵入し、空いている席に座っても受け入れてくれるようなおおらかな先生もいらっしゃいました。最前列へ潜入し着席するという難しい任務を成功させた生徒もいたほどです。そんな混沌とした日々を通して、先生方との絆が深まったのだと感じています。

この六年間は、祭囃子のように賑やかでした。一年前、僕たちが本格的に受験を目指し始めた時も、それは同じでした。立ち向かうものが文化祭であれ、体育祭であれ、遊びであれ、受験勉強であれ、楽しく喧しくやっていたのける気合いこそ、僕たちがこの六年で手にした宝物ではないでしょうか。ゴズイ玉のようにくんずほぐれつ切磋琢磨しあってきた仲間たち。

逗子湾のように、もとい、太平洋のように広い心。そして、披露山のように、もとい、雲より高い志。それら全ては、これからの人生を生きる糧になるでしょう。みんな、この逗子開成で過ごした六年間が与えてくれました。楽しい時も、辛い時も、いつだって側には友達がいました。先生や、家族がいてくれました。支えてくれました。これからもきっとそうです。それら全てに背中を押されるようにして、この先を僕たちは駆け抜けていくことでしょう。

思い出は語ればキリがありませんが、最後に一つお話させてください。二年前の夏休みのことです。高校二年生だった僕は、慶應義塾主催の小論文コンクールに挑戦していました。高校一年生の時にも参加したコンクールで、その時は次席に入選したので今回は首席を狙おうと、意気込んで取り組んでいました。六年間のうち四回も担任を持っていただいた村山先生に、二回とも添削をお願いしました。夏休みの宿題が終わっても、先生に添削していただくために八月の終わりまで学校に通いました。

その小論文の中で、僕は「幸せの本質とは何か」ということについて考察しました。もちろん、幸せの形は人それぞれです。一言にまとめ切れるものではないと思います。しかし、人が生きる上で、最も根源的な幸せの形があるはずだと僕は考えました。僕が出した答えはこうです。「人を幸せにすることこそ自分の本当の幸せである」

納得できない人もいるかもしれません。確かに、人を幸せにするのは簡単なことではないし、大きな苦勞が伴います。部活の雑用や、毎日の仕事も、辛くてとても幸せとは思えないかもしれません。でも、人を幸せにすること、つまり人の役に立つということは、自分が生きる意味や理由を与えてくれます。自分の生きている人生が有意義なものだと実感することほど、幸せなことはないのではないのでしょうか。

僕がこの考えを文章にまとめて村山先生に提出すると、先生はこう言ってくださりました。「俺は今、夏休みも終わりかけで、定期テスト直前で、問題作りも忙しくて、時間がいくらあっても足りないくらいだけど、米山のために文章を添削するのは幸せだよ」

そう言っていただいて、視界がパッと開けたように感じました。この六年間、幸せを感じることがたくさんありました。これからも幸せなことがたくさんあるでしょう。その幸せな日々は、きっと誰かの苦勞に支えられているのです。この六年間、大変なこともたくさんありました。これからもきっと苦勞することがたくさんあるでしょう。その苦しい日々は、きっと誰かの幸せを支えているのです。誰かを幸せにすることが本当の幸せなのだと思うと、僕が今まで過ごした日々すべてが、透明な優しさや瑞々しい幸せで溢れた、どこまでも美しい道筋のように見えました。今、僕たちの目の前に広がる見えない道もきっとそうです。華々しく輝くその道をしっかりと踏みしめながら、僕はこれからの人生を歩んでいきたいと思えます。

いよいよこの卒業式も終わりを迎え、僕たちが逗子開成で過ごした六年間に終止符が打たれます。しかし、これは終わりではありません。むしろ始まりです。ここから僕たちは世界

に羽ばたいて、それぞれがそれぞれの人生を、今までのように賑やかに全うしていくでしょう。一人一人がどんな道を歩もうと、この逗子の海は僕たちの故郷として、それぞれの胸の中で輝き続けるでしょう。苦労もあるかもしれませんが、僕たちはその中にある一瞬一瞬の幸せを噛みしめながら、命を鮮やかに燃やしていきます。祭りのように騒々しく活躍していきます。ですからどうか、僕たちを暖かく見送ってください。そして、これからも見守っていてください。

感謝と名残は尽きませんが、先生方や家族、同級生、先輩や後輩、そして逗子の海まで、この六年間で出会った全てに、最大限の感謝と、果てしない愛を込めて、答辞と致します。

令和二年三月一日 卒業生代表